

- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 神社のルーツを調べるため奈良に行ったとき驚きの発見をした。
 - ✓ 大和朝廷のお膝元である奈良の古社の多くが出雲系の神を祀っていた。天武天皇を祀る橿原神宮の近くの大きな古社はみんな出雲系の神が祀ってあった。
 - ✓ このことは、大和朝廷をつくるに当たって出雲族が何らかの影響力を持っていたのではないかと語る。

- ・ そして、千数百年経った今でも脈々と信仰が続いているということが、その影響力の強さを物語っているのではないだろうか。

5. 鉄が育んだ伯耆の歴史

<川岸にできた3つの楽楽福神社>

- ・ 出雲、伯耆、因幡には、古くから続く神社がたくさん存在している。
 - ・ 皆生温泉で旅館を長年経営していた中島氏によると。
- ☑ 伝承者 中島敏行氏：
 - ✓ 伯耆地方には、古い社がたくさんある。
 - ✓ これらの神社の古い伝承を調べていくと、興味深いことがたくさんあると語る。

 - ・ 日野川流域には、鉄にまつわる多くの伝説が残されている。そして伝承にまつわる古社も多く存在している。特に楽楽福（ささふく）と言う名前の神社が多く見られる。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ この「ささ」は砂鉄を表し、「ふく」は製鉄炉へ風を送る鞆（ふいご）を意味する。たたら製鉄の神様であるという。

 - ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 楽楽福神社の多くは、川の曲がり角の内側に建てられているという。
 - ✓ なぜなら、川の曲がり角には砂だまりができ、そこには砂鉄が堆積するからである。
 - ✓ つまり、そこは大切な場所であり、神社を建てるのに適した場所であったと語る。

- ・ その楽楽福神社には第七代孝霊天皇とその一族が祀られている。孝霊天皇は、隠岐島の鬼退治の後、日吉津に上陸し、溝口の鬼住山、日南の鬼林山の悪鬼を次々と征伐していったという言い伝えが残っている。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域に伝わる鬼退治伝説と、岡山吉備津神社に伝わる桃太郎伝説は同じ伝承をもとにしているのではないか。
 - ✓ 日野川流域に入って来た吉備勢力が、この在地信仰を取り込んで、流域のたたら製鉄の神を自らに都合のよい祭神にすり替えたと考えていると語る。
- ・ 坂田氏は、実際に日野川流域に鉄文化を伝えたのは、古代海人族だった可能性が大きいという。海人族と言えば、岸本町長者原を本拠地にした紀成盛もその末裔（えい）である。西伯耆の鉄を支配し、海上交易で財をなしたと言われている。
- ・ 先にも述べたが、この紀成盛が平安時代、私財を投じて大山寺の再興に力を尽くしたことは良く知られている。紀氏家の伝承によれば、紀氏の祖先も孝霊天皇に従って、日野川の鬼退治に参加したと言われている。

< 全国の 8 割を占めた和鉄の一大産地 >

- ・ 伯耆、出雲、美作、備中、備後などの中国山地一帯は、昔から製鉄が盛んであった。その生産を支えたのが、中国山地から流れ出す良質の砂鉄と豊富な森林資源であった。
- ・ 最盛期の江戸時代には、この地域が日本の鉄生産の 8 割余りを占めていた一大産地であった。
- ・ 特に、伯耆・奥日野での鉄の生産は早くから始まっていたようだ。
- ☑ 伝承者 景山猛氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 平安時代中期の「延喜式」によると、“国税”に当たる調で鉄を差し出すように指定されたのは美作、伯耆、備中、備後、筑前の五カ国であった。調の追加を定めた政令では、伯耆 606 てい、備中 290 てい、備後 250 ていの提出を義務づけられている。
 - ✓ 東大寺の寄進で鉄を出したのは伯耆、美作、讃岐だけで、伯耆は群を抜いて多かったと言う。
- ・ こうしてみると、古代から中世初めにかけて、製鉄の中心地は伯耆にあったのではないかと思えてくる。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 安来の金屋子神社も鉄の製錬技術を伝えた人を祀った社であるという。
 - ✓ 「延喜式」の神名帳には載っておらず、その後伝わってきたものではないかと語る。
- ・ 少なくとも平安時代には、出雲、石見、安芸の砂鉄製錬量はそれほど多いものではなかったと思える。
- ・ 鉄穴（かな）流しの技術が確立し、普及してからその生産量を伸ばしてきたのではないだろうか。そして戦国の世になり、尼子・毛利が奥出雲を舞台に鉄の支配を巡り争うところとなる。また、安来が鉄の積み出し港として大いに栄えることとなる。

< 宮崎駿の世界 >

- ・ 出雲地方でたたら製鉄を支えてきた鉄山師と言え、田部氏、糸原氏、桜井氏が御三家と呼ばれている。

☑ 伝承者 石村隆男氏：

- ✓ 宮崎駿監督は、田部美術館で有名な松江の田部家に約1ヶ月もの間、逗留したことがある。その影響が宮崎ワールドの中にも見られる。
- ✓ 映画「もののけ姫」の舞台は、たたら場である。
- ✓ 映画「千と千尋の神隠し」の舞台である湯場には多くの神々が集う。これは出雲地方の神在月（11月）を連想させると語る。

- ・ このようにして、もう一度宮崎作品を見直してみると、興味深いことに気づく。
- ・ 映画「もののけ姫」で、傷ついた主人公「アシタカ」をもののけ姫が水の中に横たえるシーンがある。水の中には屍がたくさん沈んでいた。
- ・ このシーンを見たときにこの地方に伝わる古い風習を連想した。それは亡くなった人を海に葬る風習である。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ 山陰地方の日本海側では中世に至るまで「水葬」が盛んに行われていたようである。しかし、江戸時代に「水が汚くなる」との理由で水葬禁止令が出されたという。

☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」

- ✓ 「出雲風土記」に、出雲郡宇賀郷に「黄泉の坂黄泉の穴」といわれる海岸の洞窟があったことが書いてある。その穴は、古代人の墓地であった。
- ✓ 宇賀郷の人々は死者を海岸の洞窟の中に葬れば、死者の魂は海の中の美しい世界に行けると考えたのだ。

- ・ このことは、「大山信仰と海のつながり」でも紹介した「死者の霊は、海に戻る」という信仰にも通ずるものである。

☑ 伝承者 杉本良巳氏：

- ✓ 東伯郡中山町の海に突き出た岬には、“捨て墓”がある。
- ✓ これは遙か海の彼方へ死者の霊が戻っていくという信仰からきているようだと言っている。

< 出雲街道の根雨宿 >

- ・ 松江藩の殿様が参勤交代で通った出雲街道の根雨宿は、明治時代まではこの地方の一大都市であった。明治元年には、24の山があった。約一万人がたたら製鉄に関わって生活しており、家族を含めると四万人もの人々を養う一大産業であった。
- ・ その中心的な存在であったのが日本一の鉄山師である近藤家である。

☑ 伝承者 景山猛氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」

- ✓ 近藤家が鉄山経営を始めたのは、江戸中期の安永8年（1779年）であったが、地域との強調、鉄山の合理化、優秀な手代（事務員）、販路の確立、蒸気力の導入など人を大切にす経営によって発展していった。

- ✓ 明治時代の半ば、近藤家は鉄山経営の近代化を進め、石炭と木炭を燃料に蒸気力で操業する福岡鉄工所を作った。そのころ日野の鉄山師は、ほとんど廃業していたが、明治 22 年鳥取県の和鉄生産量は、全国の 42% を占めていたという。
- ・ 明治時代の後半になると政府が洋鉄の生産を奨励したこともあり、それに押されて生産量を落としていった。その後、近藤家は 大正 9 年まで和鉄の生産を続けたという。
- ・ この日野川流域における和鉄生産が、皆生温泉の歴史に大きく関わってくる。

< 鉄穴（かな）流しと弓ヶ浜 >

- ・ 当時、大量の鉄を生産するために砂鉄を採る方法として、鉄穴流しという手法が使われていた。砂鉄を多く含む柔らかい花岡岩を掘り崩して水路に流し込み、比重の差を利用して砂鉄を採取する方法である。
- ・ 砂鉄が含まれる量が少ないため、莫大な土砂を掘り崩す必要があった。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域では、江戸の元禄期から大正時代までのおよそ 220 年間で、神戸港人工島の三分に匹敵する土砂が流されたという。
- ・ 今まで話してきたように、太古の昔、島根半島は沖合に横たわる防波堤のような存在であった。弓ヶ浜は今の姿ではなく「夜見の島」という島があっただけであり、中海も、宍道湖も存在しなかった。
- ・ 日野川および斐伊川流域から流れ出てきた土砂によって弓ヶ浜や出雲平野などがつくられ、その結果中海・宍道湖ができたのである。
- ・ 言うなれば、日本の鉄生産の歴史がこの山陰地方の地形を形づくったともいえる。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域から流れ出た土砂で地続きになり、広大な国土を造った。
 - ✓ しかし、鉄穴流しが衰退した大正末期あたりから、上流からの土砂供給は減り、「負の“国引き”」が始まった。
- ・ これが皆生温泉と海の戦いの始まりであった。